あとがき

最近、特に「“としより”になった」と感じる。それは、何事においてもテキパキと出来ないことに気付いている。生活上、注意をしなければならない。その証として、この「まとめ作業」も「はじめに」の日付は2015年10月15日とあるのに、この「あとがき」は年を越してしまっている。結果的には、2016年「傘寿記念」ということになった。

退職記念の比良山行、「比良の自然を　みんなで楽しもう」

古希記念の愛宕山行、「山と音楽」

傘寿記念に音羽山行、「老人とチェロ…九条への思い」

と三部作、我が人生の「しめくくり」だと、一人で喜んでいる一老人の姿である。

前回、古希記念としての「山と音楽」のときは、小寺春人君から「ひとことメッセージ」をいただきました。今回も同じく山科中学1963年卒業生で、小寺君の友人でもある天野哲也君から「ひとことメッセージ」を寄せていただきました。

カラマーゾフ、ちょっと遅かったかな？　　天野 哲也

もう半世紀以上も昔、1960年代初、わたくしは京都・山科中学校で先生に理科を教わり、その後も多感な青年期、比良や伊吹などの山登りや、人生論・社会論などを議論して、お付き合いいただいてきました。

そのころH君などは『カラマーゾフ』や『静かなるドン』『紅岩』等を読んで先生と「ひとりの命は人類全体とおなじ尊さをもつか？」と言った甚だ抽象的・観念的な議論をしていました。わたくしも一応手にとってパラパラ。「うっとうしい本、読どるナ～」。

定年後やや心にゆとりができて、永年気になっていた『カラマーゾフ』を読みました。なにが彼らをしてあれほどにまで熱中させたのか？しかしやはりピンと来ません。ついでなので『貧しき人々』『白痴』と読み進めるうちに思い至りました。先生の特質である不正義への怒り、ヒューマニズム、子どもたち次の世代への限りない期待はドストエフスキーそのものではないか？

まったく不肖の弟子で、気がつくのが遅く、われながら情けないのですが、この先も人生の先輩としての先生の生き方に注目してゆきたいと思います。

ところで、最近頂いた『ドストエフスキーの妻』によると、彼は大変なギャンブル狂で、奥さんは随分苦労したようです。子どものようなところのある先生に公子さんもさぞ苦労されたことでしょう。

いろいろとお世話になった方々へ感謝しながら、特にこの「勝手なる老人」と暮らしつづけてきた「つれあい」への感謝をこめて、「あとがき」とします。

2016年6月9日　　淵田 悌二